Ｎｏ．４３０【２０２０年１１月６日配信】
大正時代に行われたマラソン（担当：工藤）

こんにちは！　室長の工藤です。

ちょうど100年前の大正9年（1920）、この年はベルギーのアントワープでオリンピックが開催され、日本人では男子テニスの熊谷一弥がシングルスとダブルスでメダルを獲得し、また、陸上競技では金栗四三がマラソンに出場して16位になりました。一方、青森県内では「県下オリンピック」（陸上競技）の開催が青森市内の有志によって計画され、その主催団体として大日本体育協会（日本体育協会の前身）青森県支部が8月末に誕生しました。

もちろん、青森県内はまだ大正7年10月からのスペイン・インフルエンザが終息してはいなかったのですが､沈静化している夏季にはねぶたをはじめさまざまな行事が実施されていました。そのなかで今回注目したいのは、児童・生徒による「長距離走」です。この頃県内では長距離走（マラソン）がブームになっていて、たとえば、三戸郡豊崎村（現八戸市）の七崎尋常小学校では、6月に5、6年生を対象とした長距離走を2回実施して（11.7km、20.8km）児童は完走しています。

さらに、青森師範学校3年生の上野勇蔵・岩谷正雄のふたりは、8月2日～8月8日の7日間で約340kmを走る青森県一周マラソンを実施します（スタート・ゴールは善知鳥神社)。1日平均48.4kmですから、1週間続けてフルマラソン以上の距離を走る計算になります。しかも、途中で立ち寄る小学校で講演や指導を行っています。ブームとはいえ長距離走の技術は「全く滅茶苦茶に走ってゐるものが多い」という県内選手のレベルですから、こうした指導は意義のあるものであったと言えるでしょう。

秋葉祐之
（秋葉祐之『陸上競技会計画と実際』1924年　目黒書店、国立国会図書館デジタルコレクション）

ところで、この一周マラソンは7月31日に急に計画されたものでした。ふたりはどうしてこのような過酷なマラソン（夏季に長距離を走る）を計画したのでしょうか。私はこの年に師範学校に教師として着任した、秋葉祐之（あきばすけゆき）の影響があっただろうとみています。

秋葉は金栗四三に見出されたランナーで、富士登山マラソンなど厳しいコースを走って研鑽を積んできました。そしてちょうど1年前の夏も、金栗とともに下関・東京間1,200km走を実施しています。ですから上野・岩谷に限らず師範学校の生徒（陸上選手）は、秋葉に大きな刺激を受けたのではないかと思います。実は、おなじく8月に「岩木登山マラソン」を実施した師範学校生もいるのです。

ちなみに、彼らふたりは11月に実施された全国大会「第五回陸上競技会」の青森県予選に出場し､岩谷が1位､上野が3位に入り、東京での本選に出場しています。